教材研究

堀辰雄「淨瑠璃寺の春」

松谷勲鉄

淨瑠璃寺の春

堀辰雄

この春、ぼくは前から(イ)一種のあこがれを持っていたあしびの花を大和路の至る所で見ることができた。

(ロ)その中でもいちばん印象深かったのは、奈良へ着いたすぐそのあくる朝、途中の山道に咲いていたたんぽゝやなずなのような花にもひとりでに目が留まって、なんとなくなつかしいような旅人らしい気分で、二時間余りも歩き続けたのち、やっとたどり着いた淨瑠璃寺の小さな門のかたわらに、ちょうど今を盛りと咲いていた一本のあしびをふと見いだした時だった。

最初、ぼくたちはそのなんの構えもない小さな門を寺の門だとは気づかずに、危うくそこを通り越しそうになった。そのとたん、その門の方の、一本の花盛りのひもゝの木の上に、突然なんだかはっとするようなもの、――ふいとそのあたりをかけ去った、この世ならぬ美しい色をした鳥の翼のようなものが、自分の目にはいって、おやと思ってそこに足を留めた。それが淨瑠璃寺の塔のさびついた九輪だったのである。

なにもかもが思いがけなかった。――さっき、坂の下の一軒家のほとりで水菜を洗っていたひとりの娘に尋ねてみると、「九体寺やったら、あこの坂を登りなはって、二町ほどだす。」と、そこの家で寺を尋ねる旅人も少なくはないとみえて、いかにもはきはきと教えてくれたので、ぼくたちはそのかなり長い急な坂を(ハ)息をはずませながら登りきって、さあもう少しと思って、ぼくたちの目の前に急に立ち現われた一かたまりの部落とその菜畑をなにげなく見過ごしながら、こゝろもち先を急いでいた。あちこちに桃や桜の花が咲き、一面に菜の花が満開で、あまつさえ向こうのわら屋根の下からは七面鳥の鳴き声さえのんびりと聞えていて、――まさかこんな田園風景のまっただ中に、その有名な古寺が――(ニ)はるばるとぼくたち

が、その名にふさわしい、ものふりた姿を慕いながら、山道を骨折ってやって来た当の寺があるとは思えなかったのである。……

「なあんだ、こゝが浄瑠璃寺らしいぞ。」ぼくは突然足を留めて、(ハ)声をはずませながら言った。「ほら、あそこに塔が見える。」

「まあほんとうに……。」妻も少し意外なような顔つきをしていた。

「なんだかちっともお寺みたいではないのね。」

(ホ)「うん。」ぼくはそう返事ともつかずに言ったまゝ、桃やら桜やらまた松の木の間などを、その突き当たりに見える小さな門の方に向かって行った。どこかでまた七面鳥が鳴いていた。

その小さな門の中へ、石段を二つ三つ上がって、はいりかけながら、「ああ、こんな所にあしびが咲いている。」と、ぼくはその門のかたわらに、ちょうどその門とほとんど同じくらいの高さに伸びた一本の灌木が、一面に細かな白い花をふさ〳〵とたらしているのを認めると、自分のあとから来る妻の方を向いて、得意そうにそれを指さしてみせた。

「まあ、これがあなたの大好きなあしびの花？」妻もその灌木のそばに寄って来ながら、その細かな白い花を子細に見ていたが、しまいには、なんということもなしに、そのふっさりとたれた一かたまりを手のひらの上に載せたりして見ていた。

どこか犯しがたい気品がある。それでいて、どうしてもそれを手折って、ちょっと人に見せたいような、いじらしいふぜいをした花だ。(ヘ)いわば、この花の(ト)そんなところが、(チ)花というものが今よりかずっと意味深かった万葉びとたちに、たゞきれいなだけならもっとほかにもあるのに、(リ)それらのどの花にもまして、いたく愛せられていたのだ。——そんなことを、自分のそばでもって、さっきからいかにも無心そうに妻のしだしている手まさぐりから、ぼくはふいと思い出していた。

「何をいつまでもそうしているのだ。」ぼくはとう〳〵そう言いながら、妻を促した。

ぼくは再び言った。「おい、こっちにいい池があるから、来てごらん。」

「まあ、ずいぶん古そうな池ね。」妻はすぐついて来た。「あれはみなすいれんですか。」

「そうらしいな。」そう(ヌ)ぼくはいいかげんな返事をしながら、その池の向こうに見えている阿弥陀堂を熱心にながめだしていた。

阿弥陀堂へ　ぼくたちを案内してくれたのは、寺僧ではなく、(ル)その娘らしい、十六、七の、ジャケット姿の少女だった。

薄暗い堂の中にずらりと並んでいる金色の九体仏をひとわたり見てしまうと、今度は一つ〳〵たんねんにそれを見始めているぼくをそこに残して、妻はその寺の娘とともに堂の外に出て、日当たりのいい縁先で、裏庭の方かなんぞをながめながら、こんな会話をし合っている。

「ずいぶん大きなかきの木ね。」妻の声がする。

(ヲ)「ほんまにええかきの木やろ。」少女の返事はいかにも得意そうだ。

「何本あるのかしら。一本、二本、三本、……」

「みんなで七本だす。七本だすが、たくさんなりまっせ。九体寺のかきや言うてな、それを目当てに、人はんがおゝぜいハイキングに来やはります。あてがひとりでもいであげるのだすがなあ、その時のせわしいことやったらおまへんなあ。」

「そうお。その時分、かきを食べに来たいわね。」

「ほんまに、秋にまたおいでなはれ。このごろはいちばんあきまへん、なあものうて……。」

「でも、いろんな花が咲いていて、きれいね……。」

「そうだす。今はほんまにきれいやろ。そやけど、あこのあやめの咲くころもよろしおまっせ。それからまた、夏になるとな、あこのすいれんがそれはそれはきれいな花を咲かせまっせ。……」そう言いながら、急に少女は何かを思い出したようにひとりごちた。

「ああ、そや〳〵、ねぎ取りに行かにゃならんかった。」

「そうだったの。それは悪かったわね。早く行ってらっしゃいよ。」

「まあ、あとでもええわ。」

それからふたりは急に黙ってしまっていた。

ぼくはそういうふたりの話を耳にはさみながら、九体仏をすっかり見終ると、堂の外に出て、そこの縁先からはす池の方をいっしょにながめているふたりの方へ近づいて行った。

ぼくは、堂のとびらを締めに行った少女と入れ代わりに、妻のそばになんということもなしに立った。

「もう、およろしいの？」

「ああ。」そう言いながら、ぼくはしばらくぼんやりと観仏に疲れた目をはす池の方へやっていた。

少女が堂のとびらを締め終って、大きなかぎを手にしながらもどって来たので、

「どうもありがとう。」と言って、さあ、もう少女を自由にさせてやろうと妻に目くばせをした。

「あこの塔も見なはんなら、御案内しまっせ。」少女は池の向こうの松林の中に、いかにもさわやかに立っている三重の塔の方へぼくたちを促した。

「そうだな。ついでだから見せてもらおうか。」ぼくは答えた。

「でも、きみは用があるんなら、先にその用をすましてきたらどうだい。」

「あとでもええことだす。」少女はもうそのことはけろりとしているようだった。

そこでぼくが先に立って、その岸べにはあやめの少しおい茂っている、古びたはす池のへりを伝って、塔の方へ歩きだしたが、その間もまた絶えず少女は妻に向かって、この辺の山の中で取れるたけのこだの、まったけだのの話をこと細かに聞かせているらしかった。

ぼくはそういう彼女たちから少し離れて歩いていたが、実によくしゃべるやつだなあと思いながら、それにしても、まあなんという平和な気分がこの小さな廢寺を取り巻いているのだろうと、今さらのようにそのあたりの風景を見回してみたりしていた。

かたわらに花咲いているあしびよりも低いくらいの門、だれのしわざか仏たちの前に供えてあったつばきの花、堂裏の七本の大きなかきの木、秋になってそのかきをハイキングの人々に売るのをいかにも楽しいことのようにしている寺の娘、どこからか時々鳴き声の聞えてくる七面鳥、――そういうこのあたりのすべてのものが、か

つての寺だったそのおゝかたがすでに廃滅して、わずかに残っているきりの、二、三の古い堂塔を取り囲みながら――というよりも、それらの古代のモニュメントをもその生活の一片であるかのようにさりげなく取り入れながら、――そこにいかにも平和な、いかにも山間の春らしい、しかもそのどこかに少しく(ワ)悲愴な懐古的気分を漂わせている。

自然を越えんとして人間の意志したすべてのものが、長い歳月の間にはほとんど廃土に帰して、今はそのわずかに残っているものも、(ハ)そのもとの自然のうちに、(ニ)そのものの一部にすぎないかのように、溶けこんでしまうようになる。そうして、そこに(ホ)二つのものが一つになって――いわば、第二の自然が発生する。そういうところにすべての廃虚の言いしれぬ魅力があるのではないか？――そういう(ヘ)ペセティックな考えすらも、今の自分にはなんとなく快い、などやかな感じで同意せ(ト)られる。……

ぼくはそんな考えにふけりながら歩き〳〵、ひとりだけ先に石段を上がり、小さな三重の塔の下にたどり着いて、そこの松林の中からはす池を隔てて、さっきの阿弥陀堂の方をぼんやりと見返していた。

「ほんまになあ、しょむないとこでおまっせ。あてら、さかな食うたことなんぞ、とんとおまへんな。わらびみてえなものばかり食ってんのや。……たけのこはお好きだっか、そうだっか。この辺のたけのこはなあ、ほんまによろしゅうおまっせ。それは柔うて、柔うて……。」

そんなことをまた寺の娘が妻を相手にしゃべり続けているのが下の方から聞えてくる。――彼女たちはそうやって石段の下で立ち話をしたまゝ、いつまでたっても、こちらに上がって来ようともしない。ふたりの上にはなんとなく春めいた日ざしがいっぱいに当たっている。ぼくだけひとり塔の陰にはいっているものだから、少し寒い。どうもふたりとも、いい気持そうに話に夢中になって、ぼくのことなんぞ忘れてしまっているかのようだ。が、こうして廃塔といっしょに、さっきからいくぶん瞑想的になりがちなぼくもしばらく世間のすべてのものから忘れ去られている。これもこれで、いい気持ではないか――ああ、またどこかで(チ)七面鳥のやつが鳴いているな。なんだかぼくはこのまゝ少し気が遠くなってゆきそうだ。……

（三省堂「高等国語四訂版二」）

この教材の単元名は「小品」となっている。その説明には「われわれが今までに読んできたいくつかの短編小説や随筆と比べて、それと似てはいるが、やゝ性格の異なった一群の作品がある。それらは、小説のように筋を必ずしも必要としないが、随筆に比べれば構想があり、スケッチ風の文章で、小品と呼ばれることもある。小品には、詩に近いもの、随筆に近いもの、小説に近いものといろ〳〵の種類があるが、それ〴〵作者の持ち味がにじみ出ている。」と記されている。

そこでこの教材は段落を区切り、叙述に注意させ、筆者の持ち味を感じとらせたいと考えた。

それでこの教材にはいる前に次のような問題をプリントして与えておく。

(イ)「一種のあこがれ」とはあしびの花へのどういう気持ちだったのか。

(ロ)「その中でもいちばん印象深かったのは、奈良へ着いたすぐそのあくる朝、途中の山道に咲いていたたんぽゝやなずなのような花にもひとりでに目が留まって、なんとなくなつかしいような旅人らしい気分で、二時間余りも歩き続けたのち、やっとたどり着いた浄瑠璃寺の小さな門のかたわらに、ちょうど今を盛りと咲いていた一本のあしびをふと見いだした時だった。」の主語と述語とを指摘し、これに似た部分が他にもないか調べてみよう。

(ハ)「息をはずませながら」と「声をはずませながら」の違いを考えてみよう。

(ニ)「はるばるとぼくたちが、その名にふさわしい、ものふりた姿を慕いながら」に呼応する部分を探してみよう。

(ホ)「『うん』ぼくはそう返事ともつかずに言ったまゝ」とは、この時の筆者の気持ちはどうだったのか。

(ヘ)「そんなところ」とはどんなところか。

(ト)「花というものが今よりかずっと意味深かった万葉びとたちに」とあるが、万葉びとたちにとっては、なぜ花というものが今よりかずっと意味深かったのだろうか。

(チ)「いわば、この花のそんなところが、花というものが今よりかずっと意味深かった万葉びとたちに、たゞきれいなだけならもっとほかにあるのに、それらのどの花にもまして、いたく愛せられていたのだ。」という文を、「万葉びとたち」を主語として書き改めてみよう。

(リ)「それら」とは何をさすか。

(ヌ)何故「ぼくはいいかげんな返事」しかしなかったのか。

(ル)「娘らしい、十六、七の、ジャケット姿の少女」ということばは、この文章にどういう効果を与えているか。

(ヲ)「ほんまにええかきの木やろ。」など方言が沢山出ているが、どんな効果を与えるか。

(ワ)「悲愴な懐古的気分」とはどういうことに対する筆者の感慨なのか。

(カ)「そのもとの自然」とはどういう自然か。

(ヨ)「そのもの」とは何をさすか。

(タ)「その二つのもの」とは何と何か。

(レ)「パセティックな考え」とはなぜいったのか。

(ソ)「同意せられる」の「られる」の意味は何か。

(ツ)この文章には七面鳥がよくでてくるが、作者はどういうつもりで取り上げているのだろうか。

(ネ)教材書にある研究の手引をやること。

(教科書には、一、浄瑠璃寺の春をたずねた作者が、こゝで最も深く心を打たれたことは何か。二、ふたりの女性の会話が、この作品にどんな効果を与えているか。の二題の設問がある。)

まず前段(この春……ながめだしていた。)と後段(阿弥陀堂へ……遠くなってゆきそうだ。)との二段に分け、さらに内容的なまとまりで前段を六節に後段を三節に分けて考えることとする。

〔前段〕

一節　この春……時だった。　二節　最初…九輪だったのである。

三節　なにもかもが……思えなかったのである。　四節　なあんだ……七面鳥が鳴いていた。　五節　その小さな門……妻を促した。

六節　ぼくは……熱心にながめだしていた。

このように六節に分ける。次にこの六節に分けたものを時間的展開の順に配列整理すると次のようになるであろう。

三節→二節→四節→一節→五節→六節

こゝで作者が時間的展開に従わなかったのは浄瑠璃寺のあしびの花に深い印象をうけ、また浄瑠璃寺がその有名さに似ず、筆者の期待を裏切って小さな門であり、危うく通り越しそうになるものであることを言おうとするためのものであることに気づかせたい。

次に内容の検討にはいる。

＜一節＞

「一種のあこがれをもっていた……」とあるが、それが五節目の「どこか犯しがたい気品がある……愛せられていたのだ。」の個所に関係のあることを気づかせる。また「その中でも……見いだした時だった。」という長い文に注意させ、文の中間の部分はすべて下へ係ってゆくことを把握させる。さらに「たんぼゝやなづな」は大和路でなくても、どこにでも見られる雑草である。それに、ひとりでに目が留まって、なんとなくなつかしいような旅人らしい気分になっていることに注意させ、旅に出た時の何やらゆかしい特殊な気分をつかませる。

＜二節＞

こゝでは「ぼくたち」とあるから、一人旅ではないことがわかるし、「そのなんの構えもない小さな門を寺の門だとは気づかずに、危うくそこを通り越しそうになった。」ところからその門の様子を想像させてみる。（この本文の下には浄瑠璃寺の山門の凸版があるので便利である。）なお、小さな門を寺の門だとは気づかなかった理由を考えてみるよう方向づける。

＜三節＞

「水菜を洗って」で季節感をもう一度よみがえらせ「はるばると、その名にふさわしい、ものふりた姿を慕いながら」山道をやって来た作者は、もの古りた荘厳な寺の門を想像していたのであろうが、二節にあったようにそれは「なんの構えもない小さな門」であり、寺の門だとは気づかず危うくそこを通り越しそうなものであった。また、「有名な古寺」だけに、それを取り巻く環境はそれに相応したものと考えていたのだが、「あちこちに桃や桜の花が咲き、一面に菜の花が満開で、あまつさえ向こうのわら屋根の下からは七面鳥の鳴き声さえのんびりと聞えていた。」といったおよそ古寺とは違った感じのものまで配されていた。このことが三節の冒頭の「なにもかもが思いがけなかった。」となり、四節の冒頭の「なあんだ、こゝが浄瑠璃寺らしいぞ。」という言葉になったという流れを捉えさせる。

＜四節＞

同伴者が妻であることを確認させ、「『うん。』ぼくは返事ともつかずに言ったまゝ」という個所から、作者の気持ちは既に寺のほうへと飛んでいたことに気づかせる。

＜五節＞

ついで「妻の方を向いて、得意そうにそれを指さしてみせた。」の一節は「前から一種のあこがれを持っていたあしびの花」を見つけたときの喜びの気持ちの表現であることに注意させ、また「まあ、こ

れがあなたの大好きなあしびの花？」からは、一節の「あしびの花を大和路の至る所で見ることができた」とあったが、妻と一緒にしみじみと見たのはこれが初めてであった事に気づかせる。「その細かな白い花を子細に見ていたが、しまいには、なんということもなしに、そのふっさりとたれた一かたまりを手のひらの上に載せたりして見ていた。」からは夫の好きな花に妻もまたひきつけられている様子を感じとらせるとともに、この花がそんなにも人の心をひきつけるのは、「どこか犯しがたい気品がある。それでいて、どうにでもしてそれを手折って、ちょっと人に見せたいような、いじらしいふぜいをした花」であること、またこの花の色と形状から――細かな白い花で房のようにかたまりをなしている（これも凸版が利用できる）――一種の気品があること、さらに可憐さなどに気づかせる。さらに犯しがたい気品と同時にいじらしい風情を備えているこの花が「万葉びとたち」にとって今よりかずっと意味深かったのは万葉びとの方が現代の人より自然に接する度合が強かったし、花にかわる人工的な美しさが少なかったからである。すなわち現代の人には花が生活のアクセサリーにすぎないが、万葉びとにとっては花も含めて植物・動物など自然現象のすべてがもっと生活感情に直結しており「それら（＝きれいな花）」よりも愛せられていたのだと導く。参考として万葉集の

○池水に影さへ見えて咲きにほふあしびの花をそでにこき入れな
（巻二十　大伴家持）

○磯影の見ゆる池水照るまでに咲けるあしびの散らまく惜しも
（巻二十　大蔵大輔甘南備伴香真人）

○磯のうへに生ふる馬酔木を手折らめど見すべき君がありと言はなくに
（巻二　大来皇女）

などをあげるのも役に立つであろう。

〈六節〉

そして「ぼくはいいかげんな返事をしながら」をおさえ、筆者の心はもう池の向こうに見える阿弥陀堂へとひかれていることに注意させる。

こゝで以上の内容を整理させてみる。「大和路の浄瑠璃寺は、その有名さに似ず小いさな門であって意外な感じをうけた。このことは、その周囲があまりにも平和で平凡な趣であったことにもいえる。しかし、ここで万葉びとも愛したあしびの花を見つけ、妻もその花にひきつけられていた。寺にひきつけられる筆者は妻のことばにもいいかげんな返事をするのであった。およそ有名な古寺とはそぐわない環境で七面鳥も鳴いていた。」となるであろう。

〔後段〕

一節　阿弥陀堂へ……けろりとしているようだった。（阿弥陀堂を拝観している間に妻と案内娘が交わしている会話）　二節　そこでぼくが……同意せられる。……（古い堂塔を取り囲むもののうちに残っているものがとけこんで第二の自然が発生し、そこに魅力が感じられる）　三節　ぼくは……遠くなってゆきそうだ。……（妻と娘との会話をぼんやりと聞きながら瞑想的になる）

この様に三節に分け、内容の検討にはいる。

〈一節〉

そこで阿弥陀堂へぼくたちを案内してくれたのは寺僧ではなく、

その娘らしい十六、七の、ジャケット姿の少女であった。案内者が黒い衣をまとった僧なら特に変わった印象もなかったであろう。ところが年の頃十六、七の娘らしいジャケットを着た少女であったことに古い浄瑠璃寺との対照のおもしろさが感じられることに気づかせる。作者はずらりと並んでいる金色の九体仏をひとわたり見てしまうと、今度は一つ〳〵たんねんに見始めている。こうしたところから古いもの、有名な仏像への作者の関心がうかがえるし、この節の終わりの方の「観仏に疲れた目」とあることからも作者の心ひかれ熱心に見てまわっているさまを目の前に浮べさせる。それに対し妻は一わたり見て作者を堂に残して外で娘と会話をかわしている。そして三節に「彼女たちはそうやって石段の下で立ち話をしたまゝ、いつまでも、こちらに上って来ようともしない。」に気づかせる。「裏庭の方かなんぞをながめながら」の個所は作者は今、仏像を見てまわっている。したがって堂の中にいて妻たちがどこを見ているのかわからないのでこうした表現になったのであり、それに対し、堂の外へ出て妻たちの姿を見た時には「その縁先からはす池の方をいっしょにながめているふたり」とはっきりいいかえている筆者の表現の慎重さに注意させる。かきの木についての二人の会話は、この作品の中では、ちょうど織物の横糸のような効果を与えている。すなわち、ものふりた寺を訪れ、古い遺跡に対して瞑想的になりがちな作者――または読者に生き生きとした現実感を与えている。それは古いものと新しいものとの対照について考えさせる契機にもなるであろう。また寺というものはとかく悲愴な懐古的な気分を抱かせがちなのであるが、ここののんびりしたいかにも現実的な女性たちの会話はこの作品に柔らかみと明るさ、平和な気分といったものを与え「浄瑠璃寺の春」という感じにふさわしいものをもたらしているといえる。この場合の少女の関西弁は、地方色を豊かに出しており、旅の情緒も感じさせるものであることなどを把えさせ、また年に似合わない多弁な少女と妻との会話に旅行者と案内人それぞれの立場、気分なども、感じとらせる。

〈二節〉

作者が妻と案内の娘にたいし、しずかにものさびているべき古寺の境内にあって実によく喋るとやゝ煩わしく思いながら、それはそれとして、女たち二人のとりとめもない高い声の会話が響くこの古寺には、古い寺にありがちな陰影や陰鬱さがなく、なんという平和な気分の漂いを感じ、あたりの風景を見回している姿を思い浮かべさせておき、つぎに「かたわらに花咲いているあしびよりも低いくらいの門、だれのしわざか仏たちの前に供えてあったつばきの花、堂裏の七本の大きなかきの木、秋になってそのかきをハイキングの人々に売るのをいかにも楽しいことのようにしている寺の娘、どこからか時々鳴き声の聞えてくる七面鳥」（独立節）「そういうこのあたりのすべてのものが」（主語）「そこにいかにも平和な、いかにも山間の春らしい、しかもそのどこかに少しく悲愴な懐古的な気分を（しかも）漂わせている。」（述語）と文脈を把握させる。そして東大寺や法隆寺というような、古代の芸術、記念物が厳然として存しているところでは、古代人の意志と知恵の表われ――壮大、荘厳な建築美や彫刻美などをある種の威圧を覚えて仰ぎみるという感じが強いであろう。しかし浄瑠璃寺のようにすべてに古代の偉容を語るものがおゝかた廃滅し、僅かに少数のものが残り、他の人為的なものはもっと大きな周囲の自然の中に同化吸収されて溶

けこんでしまっている。そこでは「いかにも平和な山間の景」として訪れるものにある心の休らぎを与えるであろう。ここではすでに現代の生活が息づいていても不自然ではないほどである。しかし、そうはいっても、人間が意志して、かつてそこにあったものが長い歳月の間に自然に同化吸収されてしまってなくなるという事実に対する感慨はなくはない。それを作者は「悲愴な懐古的気分」と表現し、長い歳月の間には人間の意志したすべてのものを同化吸収してしまう自然の偉大さに対する感慨と、その点に廃墟の魅力を発見した感動を「パセティックな考え」といったのだとたどらせる。

〈三節〉

作者は時々七面鳥を登場させているが、古寺と七面鳥の鳴き声が新旧対照の妙を感じさせ、廃墟感の裏づけともなっていることに思いいたらせる。

以上のように内容の検討を終わり、作者が最も心うたれたものは、あしびの花が低い門のかたわらに咲いている浄瑠璃寺の印象にあったのではなく、廃墟の魅力、浄瑠璃寺の春ののどかな平和の気分の発見であることへと導ければ幸いであろう。しかし筆者自身もこうした日本的風土に愛着を感じ、日本的感性の世界への帰郷とでもいうべき非西欧的直観的意志を感じとるようになったのは真正面から一女性の生死をみつめ（許婚矢野綾子の死・作者三十二歳）、それが過去の風景観を一変させたことを考えあわせて見ると、相当大きな困難が待ちうけていると考えられる。

またこうした心理的造形と定着とが、第二次世界大戦の最中にあった意義について、つけ加えることも必要な気がする。

そのほか読みの留意点としては、濁音をしっかり読むこと（たとえば、印象深かった・旅人・花盛りなど）。hiとsiの区別に注意すること（七面鳥など）。方言を効果的に読む工夫などがあげられよう。

（京都府洛東高等学校教諭）